

| テーマ |

跳躍

[View of This issue]

01 フロー／ゾーン

● 理事・副学長(広報・情報・国際担当) | 松岡 守

[特集／三重大学特別企画]

02 サッカー日本代表前監督

岡田武史氏『トークセミナー』

〈信念・決断・挑戦〉～人が輝くとき～

● サッカー日本代表前監督 | 岡田武史

[RESEARCH FRONT]

07 カナダ先住民の

現代の生活世界を読みとく

● 人文学部准教授 | 立川陽仁

09 「運動による健康づくり」と

「運動を広める人材づくり」を推進。

● 教育学部准教授 | 重松良祐

11 本学独自の人工染色体技術により、

マラリア耐性遺伝子の同定に挑む。

● 大学院医学系研究科准教授 | 岩永史朗

13 人のような運転を行う

自動走行する乗り物の実現を目指して。

● 大学院工学研究科准教授 | 早川聡一郎

[CLOSE-UP Interview]

15 魚たちを分類し

この地球に生きた証を記録するために。

● 大学院生物資源学研究科教授 | 木村清志

[連載] CHRONICLE OF MIE VOL.7

17 【文学編】

神島を舞台に。三島由紀夫の小説『潮騒』。

● 人文学部教授 | 尾西康充

19 【美術編】

「涅槃図(ねはんず)」

● 教育学部教授 | 山口泰弘

21 TOPICS

22 2010年6月～12月 三重大学の主な出来事



フロー／ゾーン

理事・副学長(広報・情報・国際担当)

松岡 守

中学校でロボット作りの授業を行うと生徒が制作に極端に熱中する場合があることが知られています。放課後に自主的に集まって作業を続け、先生が、もう帰らなさい、と言っても帰ろうとしない「下校拒否」、教育困難校で当初は乱暴に取り扱っていた自分たちのロボットを大事に扱うようになるだけでなく、トイレの扉も丁寧に開け閉めするようになり、さらには学校全体の風紀まで改善されたという報告もあります。これは心理学者のチクセントミハイが論じた「フロー状態」になったことによると考えられます。フロー状態になることで高密度の学びが実現し、それがいろいろな面で良い結果につながったのでしょう。

フロー状態はスポーツの世界では「ゾーンに入る」と言いますが、サッカー日本代表チームがゾーンに入っていたことを本学で開催したトークセミナーの中で岡田前監督が披露されました。高所にも関わらず走り回り、多くの人に感動を与えたスーパープレイは確かに異空間に入り込んだ人達の技だったような気がしてきます。

高い効果を持つフロー／ゾーンは、学びやスポーツに限ったものではなく、研究、さらにはより一般的なプロジェクトにも起こり得ます。それをどのようにいろいろな場面で引き起こせるものなのか、私にはこの点が一番心に響いたトークセミナーでした。今回の特集記事をご覧になって皆様はいかがでしょうか。

まつおかまもる
工学博士

専門分野は、技術教育、知財教育、放電工学



特集／三重大学特別企画

サッカー日本代表前監督

岡田武史氏『トークセミナー』

〈信念・決断・挑戦〉～人が輝くとき～

2010年12月12日、三重大学では

三重大学特別企画としてサッカー日本代表前監督・岡田武史氏をお迎えし、

三翠ホールにおいてトークセミナーを開催しました。

2010FIFA ワールドカップ南アフリカ大会において、

日本代表をベスト16へ導いた前監督のチームづくりへの信念や決断の背景、

高い目標への挑戦など、熱い想いを語っていただきました。

岡田武史氏によるトークセミナーは、三重大学教育学部・杉田正明准教授が日本代表チームにトレーニングドクターとして帯同したご縁によって実現しました。2010 FIFAワールドカップ南アフリカ大会では、会場の多くが標高1300～1750mの高地。選手の高地順化が勝負のポイントとなるなかで、日本代表は大きな成功をおさめました。その功労者の一人、高地トレーニングの専門家である杉田准教授との出会いから、岡田氏のお話は始まりました。

高地順化を目指すチームに スポーツ科学を導入

今回の南アフリカ大会の会場は非常に標高が高く、我々も高地対策が必要だろうとは考えていました。しかし、どのくらいの期間、どの程度の練習をすれば高地順化ができるのか。高地順化の効果が低地に移ったらどのくらいもつのかなど、わからないことばかりでした。そこで、W杯のキャンプ地とスケジュールに合わせて高地順化を維持するにはどうしたらいいのか、ナショナルトレーニングセンターで研究しておられた三重大学の杉田先生にご相談したんです。すると、低酸素マスクでの準備から練習の内容、強度にまで話が及ぶので、杉田先生には国内合宿とスイス合宿に来ていただき、高地トレーニングや選手のコンディション管理を行っていただきました。ところが、尿や血液検査から疲労度を数値化するという杉田先生のスポーツ科学の手法は、今までサッカー界では取り入れたことがなく、合宿の途中でこのまま本大会にも帯同をお願いしたいということになりました。予定外のことでしたから三重大学さんにはご迷惑をおかけしましたが、学長先生がこちらの依頼を快諾してくださいました。おかげで杉田先生のアドバイスのもと、南アフリカでの練習量を調整し、素晴らしい仕上がりで試合を迎えられたんです。今回

のチームは1ヵ月半一緒にいて、選手のなかにケガ人も病人もゼロ。僕は長いこと指導者をしていますが、こんな経験は初めてです。それも杉田先生をはじめとする素晴らしいスタッフたちのおかげだったと思っています。

志高い目標を設けることで 選手、スタッフの心を一つに

この代表チーム、ご存知のように大会前は調子が悪かった。中心となる選手たちが調子を落とし、大会直前に4連敗。そこで選手とフォーメーションを、かねてから考えてきた形に変えました。メディアには随分と叩かれましたが、そのおかげで選手たちに見返してやろうという気持ち生まれ、本大会で爆発したんでしょう。そういう意味でプレッシャーとは受けているときは苦しいものですが、後から考えてみると、いつも自分を鍛えてくれるものなんです。それは地球における重力と同じです。人間は重力がないと筋肉も骨もダメになりますよね。重力に反発するから人間は強くなれるんです。そして、チームは非常にいい状態で初戦に勝ち、この勝利によって考えられないレベルに力が上がりました。これをスポーツの世界では「ゾーンに入った」と言います。何も考えていない無心の状態になり、理想の動きができるようになることです。どうしてゾーンに入れたのか、それは今でもわからないのですが、事前にきっかけになるような種はいくつも蒔いてきました。大会1年前のことです。チームを見たとき、この1年でかなり伸びないと世界に勝てないと感じていました。しかし、代表の選手はそれぞれ所属チームにいて、毎日一緒に練習はできません。ならばと、志高い目標とフィロソフィー（哲学）を設定し、共有することにしました。目標はベスト4。「俺と一緒に本気で目指してみないか、チャレンジしてみないか」と、手紙を出しDVDも送り、選手に問いかけ続けました。そして、最終的に本大会へ行ったとき、全選手、全スタッフ

が本気でベスト4を目指してくれたんです。

ともに戦うための チームづくりのフィロソフィー

フィロソフィーについては、「Enjoy、Our team、Concentration、Improve、Do your best、Communication」の6つをチームづくりの中心にすえました。そのいくつかをひもといってみましょう。まず「Enjoy」。これはW杯といえども、サッカーを始めたときの喜びを絶対に忘れるな、ということです。究極のエンジョイは、自分の責任でリスクを冒すということ。選手はミスをおそれて保証を欲しがりますが、「監督に言われた通りにしました」では、面白くもなんともないでしょう。選手が自分の判断でリスクを冒せるかどうか。それによってチームの力が変わってくるんです。次に「Our team」。これは、このチームは選手たち一人ひとりのチームだという意味です。試合がうまくいかなかったら、監督やキャプテンが何とかしてくれると思ったら大間違い。「自分のチームなんだから、自分でなんとかしろ。日本代表はそうならないと絶対に勝てないぞ」と、僕は選手たちに言い続けてきました。世の中、人のせいにしたり、人任せの人が多くありませんか。すべての上司、先生、監督が自分にとって都合よく存在するわけではありません。現状のなかで自分がどうやるかが大事なのに、自分でやるべきことをしないで人のせいにする。自分でうまくしようとしないやつは、決してうまくなりません。自分で何かをやりたいという意志、それを「Our team」に込めているんです。もう一つ「Concentration」は、今できることに集中しろという想いを込めた言葉です。人間は過去のことを振り返っても、未来のことを考えても不安になって、今、何もできないと思ってしまう。でも、今やれることをやらなければダメなんです。無駄な考え、行動を省くのが勝負の鉄則。今できることに集中、これが大切です。



最初からあきらめたら何も起こりません。
でも、何か目標や夢にチャレンジすると、
それがかなわなくても必ず得るものがあります。

岡田武史 Takeshi Okada

1956年生まれ、大阪府出身。現在、日本サッカー協会理事。
中学1年でサッカーを始め、高校時代にユース日本代表。
早稲田大学卒業後、古河電気工業入社・同サッカー部に入団、日本代表として活躍する。
現役引退後、ジェフユナイテッド市原コーチを経て、仏W杯の日本代表監督に抜擢。
その後、コンサドーレ札幌、横浜F・マリノスの監督を歴任。
2007年再び日本代表監督に就任し、南アW杯でベスト16入りを果たす。



エデュケーションの語源はラテン語でエデュカトーレ、引き出すという意味です。選手の気持ちをいかに引き出すか、これがポイントだったんです。

こうして意志統一ができたために、今回のチームは密にコミュニケーションが取れ、試合に出られないベテラン選手も献身的にサポートしてくれた。この気持ちがゾーンに導いてくれた一つの要因であると思います。

夢や目標に挑戦すると必ず得るものがある

僕は2006年に横浜F・マリノスの監督を辞めたとき、指導者としての限界を感じていました。当時、僕は理屈で納得させることで選手を動かし、ある程度の成績を残していたんですが、勝ってもこれが本当に指導なのかと思うようになった。自分の理想は、選手が目を輝かせて躍動するようなサッカーだと言ってきたのに、いつの間にか選手は僕の言うことをききと守るだけになってしまったんです。監督を辞任後、自分が本当の指導者になるまで現場には戻らないと決

め、何か限界を超える秘密の鍵があるはずだと思って、ありとあらゆる勉強をしました。経営者セミナーにも通ったし、脳や心理学、運動生理学、琉球空手、気功、占星術まで学びましたが、結局わからなかったんですね。ところがオシム前監督が倒れ、頭で考えるとこんな割に合わない仕事はないと思いつつも、代表監督を引き受けてしまった。秘密の鍵も何もなかったけれど、挑戦するんだという気持ちが抑えられなかったんです。こうなったら、もう開き直るしかありません。監督の仕事は決断することです。どの選手を使うのか、たった一人で全責任を負って決断しなければならぬ。それがW杯ともなれば、震えがくるほど怖いんです。そんなときにどうするかというと、自分のすべてを捨て去る。無心、無私の状態になって、明日もし死ぬとしたらチームが勝つためにどうするかと考えたとき、パッと浮かんだものを僕は選んできました。

もちろん簡単には無心になれません。僕も以前はそうでしたが、人間、どん底を経験するとなれるんです。1998年のフランスW杯のとき、僕は監督経験もないのに、いきなり41歳で代表監督を引き継ぎました。負けると罵声を浴びせられ、脅迫状や脅迫電話が止まらず、正直、逃げ出したかったです。でも、W杯初出場のかかったジョホールバルの試合を明日に控え、どん底にいたとき、ボンとスイッチが入ったんです。「明日、俺は自分のすべてを出す。命をかけてやる。それで勝てなかったら俺の力不足や。でも俺のせいやない。日本のサッカー、俺一人で背負えるかい」と。そう思った瞬間、開き直って無心になった、力がわいてきたんです。いまの子どもたちは生きる力が落ちていと言われますが、それは現代社会に大きな山も谷もないからではないでしょうか。何もしなくても生きていけるかわりに、困難を乗り越えたときの感動も少なくなっている。でも、自分で山はつくれます。それが目標であり、夢です。最初からあきらめたら何も起こりません。でも、何か目標や夢にチャレンジすると、それがかなわなくても必ず得るものがあります。生きる力がついてきます。我々もベスト4という目標は達成していませんが、もって得がたい大きなものを手にしました。大会後、僕は鶴岡八幡宮に奉納するぼんぼりに「ベスト4かならずも、夢かなう」と書きました。こういうチームをつくってみたい、こういうプレーをさせてみたいという夢がついにかなったんですから。

どんなときも手を抜かない簡単にあきらめない

僕が探していた秘密の鍵ですが、のたうちまわりながら代表監督をやっているうちに、気がつけば手の平に乗っていました。鍵とは何か簡単にお話すると、僕はそれまで指導や教育というのは、空のコップにいろいろと入れてやることだと思っていたんです

ね。でも、エデュケーションの語源はラテン語でエデュカトーレ、引き出すという意味です。どの選手もこのチームで勝ちたいと思っている。その気持ちをいかに引き出すか、これがポイントだったんです。秘密の鍵が見つかったとき、僕は「淵黙雷声」という言葉を思い出しました。これは弟子がお釈迦さまに「悟りとは何ですか」とたずねると、お釈迦さまは深く沈黙して、その沈黙が雷のように大きく響いたという意味です。つまり、悟りについて能書きをたれる前に、修行して一歩でも悟りに近づきなさいと、無言で伝えたんです。あれだけ勉強してもわからなかった鍵を、今回、僕は代表の合宿で選手やスタッフたちに教えてもらった。それはともかく一歩、踏み出したからこそだったのでしょう。僕は自分のことをいい指導者だとは思っていませんが、何かいいところをあげるとすれば、簡単にあきらめない、投げ出さないところだと思います。運というものは誰の前にも流れている。それをつかむか、つかみそこねるか。その違いは、たった1回手を抜くか抜かないか、それだけではないでしょうか。僕の場合、運をつかみそこねないよう必死に手を抜かずにやってきたら、今のところ最後に神様がご褒美をくれています。勝負の神様は細部に宿る、これが僕の信念です。三重大学の皆さんにも伝えたい。どんな目標でも、夢でもいい。ぜひ本気で全力でチャレンジしてください。そして、ちょっとやそっとのことであきらめないでください。きっと最後に神様が何かご褒美をくれると思います。

代表監督にかかる想像を絶するプレッシャーを乗り越え、自らの信念のもとに決断し、高い目標へ挑んできた岡田氏。三重大学が教育目標に掲げる「生きる力」に通じるお話もあり、その不屈の生き様は、観客の皆さんの気持ちをおおいに勇気づけるものでした。岡田氏の言葉は、これからの人生を生きる上での力強い指針となるはずです。



サッカー日本代表前監督
岡田武史氏「トークセミナー」
〈信念・決断・挑戦〉～人が輝くとき～

日時：2010年12月12日
会場：三重大学講堂（三翠ホール・大ホール）
司会：高橋和代

地域の観客約1600名が会場を埋めつくした当日。まず、内田淳正学長のあいさつに始まり、杉田正明准教授による代表チームでの活動紹介の後、岡田武史前監督のセミナーが行われました。質疑応答では、岡田氏のウィットに富んだ回答に会場からは大きな笑いが。熱く楽しいトークに喝采が贈られるなか、セミナーは幕を閉じました。